

# 画像情報技術の展開



常務取締役 傳田 精一

コニカは画像情報産業の中で成長、発展を続けてゆかねばならない。従って我々の基本的な技術目標は云うまでもなく画像情報技術の限りなき推進である。

画像情報技術（Imaging Technology）は実に広い範囲の技術領域を包含し更に拡大しつつある。まず我々は銀塩画像という優れた技術を、ほぼ完成に近い状態で保有している。発明後100年以上を経過した今日でもなお他技術の遠く及ばない最高級の画像品質を低コストで実現でき、かつ現在でも要素技術の開発が続けられている。銀塩技術の底深さには驚嘆せざるを得ない。

しかし銀塩技術のもつ高画質とトレードオフとして、ある程度の時間が必要な現像、印画プロセスや、プリントでしか見られないというある種の「扱いにくさ、不便さ」に対して、テレビに代表される電子画像技術は、画質の不満足と引換えに「扱いやすさ、面白さ、自由度」を与えてくれる。又その画質も急速に改良が進み、数年後のハイビジョン時代には銀塩にかなり接近するであろう。

各種のメモリ装置や CCD の高密度化、画像圧縮技術、カラープリンタの高性能化、ディスプレイ、光ファイバ通信、LSI の進歩、さらにはそ

れらを結合するソフトウェア等々すべてのソフト・メカニカル・エレクトロニクス技術が雪崩を打って電子画像領域に殺到している。最も強力な道具であるコンピュータも長い間のデータ処理の世界から抜け出して、画像を扱えるまで成長して来ている。

デジタル画像技術の進歩は、我々が人間の目の網膜細胞に限りなく接近してゆくというイメージを抱かせるし、銀塩画像の微細な粒子はデジタルの1ビットに対比できよう。我々はそのでは銀粒子を1つずつ取り出し、エレクトロニクスを使って任意の色をつけて、丁寧に並べ換えた画像を手に入れることが出来る。

私は近年の多くの技術開発の例から、新技術は在来技術と競合するよりも、助け合う要素の方が大きいと信じている。OA 革命は当初競合すると思われた紙産業を成長させた。銀塩と電子画像は決して競合者ではなく、互いに助け合ってすばらしい総合イメージングテクノロジーを作り上げるに違いない。究極の画像情報技術とは、銀塩の高画質と電子画像のフレキシビリティを持ったシステムであろう。すでに多くの試みがなされているが、我々は今後の多様な画像システムに対応できるよう、着実に準備を進めてゆかねばならない。